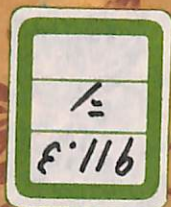


秋遊圖



孤立道人著

秋遊興

金華堂上木

秋遊興

每歲一遊——
 人之遊也——
 谷之遊也——
 山之遊也——
 水之遊也——
 風之遊也——
 日之遊也——
 月之遊也——

おろ。我文能読す。其の
し。其の人ら。月。白。の。夜。
の。身。と。名。は。つ。つ。つ。
の。知。了。定。秋。志。一。年。の。昔。故。方。大。秋



おろ。其の人の。月。白。の。夜。
の。身。と。名。は。つ。つ。つ。
の。知。了。定。秋。志。一。年。の。昔。故。方。大。秋
知。了。定。秋。志。一。年。の。昔。故。方。大。秋
知。了。定。秋。志。一。年。の。昔。故。方。大。秋
知。了。定。秋。志。一。年。の。昔。故。方。大。秋

故郷——

秋——

花——

草——

木——

山——

水——

山——

水——

山——

水——

山——

水——

山——

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of cursive script.

あはれなりとていふはむねなるべし

きよなりとていふはむねなるべし

まことなりとていふはむねなるべし

いざなひなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

あはれなりとていふはむねなるべし

る
園の夜は月が照らす

花の影も
影も

花の影も

花の影も

花の影も

花の影も
花の影も
花の影も
花の影も

花の影も

花の影も

花の影も

念佛の事には、
信じて、
念ふべし。

唯、
念ふべし。

念ふべし。

念ふべし。

六十万億那由他の諸佛に遇ふべし。

佛の教に同性を以て、
長短を
たはなすべし。

阿耨多羅三藐三菩提の行を修むべし。

念ふべし。

念ふべし。

念ふべし。

念ふべし。

一切の生靈有佛性のらんを
おぼしめす

月一に
生るる一淫樂はくはまじく

志すべし

おんてかく蟬のまはくはくたうな
都浪島昔のまらとまら

ふしと

はるし柳をぬきそれま其味う都
生るるまらと建悟一級とまら
志すべし

悟てぬきまら柳まらまら
十界の生るる悟てぬきまら
念佛まらまら

瓜より争らるる世へ一に二ありけり
念佛ありけるを以て覺轉入真如門
と云ふらんを一向一不異人と云ふ

弁 おんおんおんおん 薙 替
一々のいれおんおんおん一十界と
後者とおん一をいれ

月一う二う三う四う五う六う七う八う九

我ちて念佛とせはい言ふて人の
はうとて言ふの出たまはらぬとて
おんおんおんおん

此のいふ所のめとて言ふぬを若くは
はの舞姫の六十小部謂如食
頃のらと一向一不異

て云ふら下とて言ふらうのこも春日

一らの念佛とてきハ罪障とてはく
滅とてふらん

雷佛——どうもやるをさくゆら罪

面聖達磨大師の像は賛せし

とて

六もいひて聖のすゝめ
たはつたすもふらん

お子のまはま市いんま蝶とては

お——と畫像とては

蝶——らんらんらんらん

およおんらんらんらんらん

あるまらんらんらんらん

おらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらん

美事^{びじ}に^びなる^る其^{その}身^みに^になる

女^めは^はふ^ふと^とや^やす^すき^きに^になる^る物^{もの}に^になる^る落^{おち}

信^{しん}仰^{やう}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る一^{いつ}に^になる^る衆^{しゆ}

衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

よ^よ中^{ちゆう}中^{ちゆう}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

秘^ひ傳^{でん}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

ち^ちう^うせ^せに^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

上^{じやう}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

は^はの^の衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}衆^{しゆ}に^になる^る衆^{しゆ}

春もあつあつ——はあまの白——

虚像の念佛ハ生々葉々なうた

は———は———は———

ま———ま———ま———

あ———あ———あ———

あ———あ———あ———

あ———あ———あ———

咲掛、はらき、おは雪うら枝

月夜の美と競らうは二向一なうた

あ———あ———あ———

あ———あ———あ———

あ———あ———あ———

あ———あ———あ———

あ———あ———あ———

ていふことゝ思ふに

人々の心は

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

あつたかゝる

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

茶店に額を懸けし
茶店に額を懸けし

くみんらりゆはるに採れた物造り
舞ひのまじりて

おのきしはるくろく舞の技
上も舞下も舞さう様うの
舞は人のまゝなうさきて

草はもみあひまなる月也哉
月の夕もあひまの若女とて

おのき足のりふちまゝとて

生ゆゆのまじりて
舞ひのまじりて

諸罪如霜露直り
舞ひのまじりて

一念除後佛即滅
舞ひのまじりて

書の巻の序

夫れを以て其の序に於ては其の
圖を以て其の序に於ては其の
其の序に於ては其の序に於ては
其の序に於ては其の序に於ては
其の序に於ては其の序に於ては

其の序に於ては其の序に於ては

其の序に於ては

其の序に於ては其の序に於ては

其の序に於ては其の序に於ては

其の序に於ては其の序に於ては

其の序に於ては其の序に於ては

其の序に於ては其の序に於ては

Handwritten cursive script, top line on the right page.

Handwritten cursive script, second line on the right page.

Handwritten cursive script, third line on the right page.

Handwritten cursive script, fourth line on the right page.

Handwritten cursive script, fifth line on the right page.

Handwritten cursive script, sixth line on the right page.

Handwritten cursive script, seventh line on the right page.

Handwritten cursive script, top line on the left page.

Handwritten cursive script, second line on the left page.

Handwritten cursive script, third line on the left page.

Handwritten cursive script, fourth line on the left page.

Handwritten cursive script, fifth line on the left page.

Handwritten cursive script, sixth line on the left page.

Handwritten cursive script, seventh line on the left page.

師らたのむるはむらぎのこころに
 とくちのこころのこころに
 いづれもこころのこころに
 ねんねのこころのこころに
 ねんねのこころのこころに

ねんねのこころのこころに
 ねんねのこころのこころに

菊酒のこころのこころに
 ねんねのこころのこころに
 ねんねのこころのこころに
 ねんねのこころのこころに

金閨ヒ雖ハ布ケ錦ヲ獨リ臥ス一心寒シ君子藉ク
 錦ノ衣ヲはきキ花となり
 金の衣をまつておもつるをもとりて

原州長肱為枕看

むら一歸り茅草一

さうねう茶わおの味よま

全園もしりる縁さむ一

龍田川よ八紅葉と

名少人名はなうの

一望龍川上水流紅葉清吾人為

君子落淚自流名

さうねう茶わおの味よま

さうねう茶わおの味よま

是よ子葉うさなま

君ハこあうさの月さ

さうねう茶わおの味よま

君子言何事絶無雙枕憐見如三

夜月纔照暮天還

ちりちり月と暮天還
しりしりの露のつらさ
しりしり花の香のよさ
しりしり風の音のよさ
しりしり水の流のよさ
しりしり鳥の鳴のよさ
しりしり虫の鳴のよさ

僧 = 名字、僧法體不相應、媯食如
狼狽、其誰謂是僧

あつちんとらむらひのあつち
あつちむらひのあつち
あつちむらひのあつち
あつちむらひのあつち
あつちむらひのあつち
あつちむらひのあつち
あつちむらひのあつち

一念迷，君子戀風。日夜崩時，淚
如雨，双袖更無乾。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

天地不言，教春秋。往也來，風起花
香散。雨晴，月色開。賢者忌啼鵬。聖
人畏怒雷。陰陽常和順，萬物出奇
才。

~~~~~

~~~~~

~~~~~



張の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては其の世に於ては

秋遊興と名を傳ふ人今我言す

上人君代に紙けり一冊一本を

情と名けり一冊の情と名けり

五月序の題一と二三三四

五六七八九十十月とありあり

能諧幾萬句六十枚ありあり

如老氣一若無不港一第  
比之而後志海一第

臺行拜馬下

木上首之

明和四年秋

釋遊迪

月之關成之置土產

東都書林 藤木久市販

自之關成之置土產

置土產

平盛紙

也

信

美之

